

はできないのだということを私は感じました。走るということから、私と子どもたちと私の赤ちゃんの

近況を書いてみました。

(江東区立明治小学校)

## 走る 玩具

### くクルマの魅力く

村松 明子

クルマのおもちゃは、いつの時代も男の子に支持される玩具のジャンルの一つです。クルマとひとくちに言っても、電車、自動車、バイクなどさまざまですし、年齢によって魅力を感じる特性も色々のようです。

〇二歳ほどの小さな男の子は、クルマの玩具

——車輪のついたオモチャ——を目の前になると、たいいていその背を手の平で押して「ブーブー」といながら動かそうとします。「ころがし走行」というのですが、この年齢用の、いわゆるベビーあるいはブリスクルトイと区別される玩具のクルマは、色あいも車輪のしくみもシンプルです。ゼンマイや

電池式のクルマだと車輪にギアのかみがあるため、動力を使わずにころがして走らせようとするとかみがこわれて、かえって都合が悪いものが多いのです。「ころがし走行」をする男の子を見ると、小さな小さな子にとってもクルマは「走る」という動性を象徴しているのだなあと感心してしまいます。

三歳くらいから、実在のクルマの形態に興味があり、自動車や電車の種類や名前を片っぱしから覚える男の子が少なくありません。クルマの玩具にもそれが反映されて、実在のクルマのミニチュールは定番として根強い人気です。キャラメル箱ほどの大きさで一台三六〇円、百数十種ラインナップのミニカー「トミカ」や、青いプラスチックレールを自在につなげて新幹線から山手線まで色々な車種のある「ブラレール」は、男の子をもつお母さんなら知らない人はいないと言ってよいくらいでしょう。クルマそのものだけでなく、それをとりまく信号、ガンリンスタンドや、駅・トンネル等の交通・鉄道施設

の小物をもそろえて、自分なりのワールドをこしらえることも大きな楽しみでしょう。実際の世界へと興味を広げ、そこでダイナミックに走るクルマに対するあこがれを、そっくりなデザインで小さな自分が十分に把握できるサイズのミニチュールを所有し、世界を構築することで満たしているのでしょうか。近ごろでは、サイレンの鳴るミニカーや、集めたミニカーをたっぷり飾りつつ収納もできるコンボイ、リモコンでスピードや走る方向を調整できるレールセットが人気です。

小学生になると、そういった小さな世界をとび出して、クルマ、それも自動車のスピード感とフォルムにひかれていくようです。プルバック（クルマをバックにころがし走行されることでねじを巻ける仕組み）で走る、「チョロQ」や、街のおもちゃ屋さんの溝のような専用コースで大会が開かれるほど流行した「ミニ四駆」は、いずれも、まさに「走る」というクルマならではの最大の特徴が魅力となつて

います。しかも、この年頃の男の子の好きな、デフォルメされたデザインと数多い車種も人気の原因でしょう。何台も買い集めては友達と見せあい、走らせて競走します。

さらに大きな男の子がクルマの玩具に熱中する場合、三方向に分かれるようです。一つは、幼い頃からのミニアチャールをさらに極めること。鉄道模型と呼ばれる、りっぱなホビーの一ジャンルで、部品の一つ一つも正確な縮小率でかなり精密なので、高価です。二つ目には、クルマのスピード感をさらに強調させた、AFXと呼ばれるレーシングもの。連結式のコースに埋められた針金に流された電流でミニカーほどのレーシングカーが、すごい速さで走ります。三つ目には、ラジコンです。最近ではF-1人気で、ラジコンでもF-1の車種がよく売れます。ラジコンは何といても自在に「走らせる」ことの楽しさが魅力でしょう。以上の三つとも、大人でも好きな人は本当に熱中して、専門誌等があるほどで

す。

クルマのおもちゃの魅力は、やはりそのサイズやフォルム・デザイン——実在のものに基づいた——と、「走る」というダイナミズムとの両点を備えているところだといえるでしょう。

(玩具メーカー勤務)

